

マジユムダール、ライチョー

ダリー、ダッタ三氏共著

「高等インド史概説」

和田久徳

インド近世史専攻のカーリーキンカル・ダッタ氏との三氏共著のこの書は、インド史概説書の最新のものの一つである。初め一九四六年に、第一巻古代インド・第二巻中世インド・第三巻近代インドの三分冊として刊行されたが、その後一九四八年にその訂正版が出され、ついで一九四九年には合巻一冊版となり、一九五〇年に至って、多くの訂正増補を含んだ第二版が出たのである（一巻本が出た後でも、同時に三分冊本も發賣されてゐるやうである）。

## 二

R. C. Majumdar, H. C. Raychaudhuri and Kalinkar  
Datta: An Advanced History of India. London, 2nd  
ed., rev. and enl., 1950. pp. xii+1122. With 4 coloured  
maps, many illustrations and plans.

前ダッカ大學の總長兼史學教授で、インド史學界の長老であり、インドと東南アジア各地との交渉史を得意とするマジユムダール博士と、カルカッタ大學のインド古代史教授ライチョーダリー氏と、パトナ専門學校の史學科主任教授で、イ

内容の構成は、序文 (pp. v-vii) と目次 (pp. ix-xiii) に  
ついで、本文は三部に分かれてゐる。

第一部古代インド (pp. 3-272) は十六章より成り、その  
中、第一章では歴史の基礎となるインド半島の自然現象、及  
びインド史に内在する統一性を論じ、第二章は先史時代で、  
舊石器時代からインダス文明までの考古學上の成果を述べて  
居り、ついで第三章以下はヴェーダ時代から回教徒侵入直前

マジユムダール、ライチョーダリー、ダッタ三氏共著「高等インド史概説」

和田

第參拾六卷

一一五

までの時期を扱つてゐる。此等諸章の次には、諸王家の系譜と各章別に記された文獻目録とが附いてゐる。この古代史の部分は、第二章先史時代、第十五章「東南アジア各地に對するインドの」植民的及び文化的發展、第十六章古代インドの遺跡の三章をマジュムダール氏が擔當した他は、悉くライチヨードグリー氏の執筆である。

第二部中世インド (pp. 275—626) は、更に第一篇回教徒征服とデリーのスルターン諸王朝・第二篇ムガル帝國の兩時期に分かれたれ、前者は六章 (pp. 275—423)、後者は八章 (pp. 423—601) より成つて、云はゆる回教インド時代を記してゐる。その次に諸王朝の系譜と章別の文獻目録があることは第一部と同様である。この中世史の兩篇計十四章は、最初の第一篇第一章 (回教徒の到來と題し、デリー政權確立以前の回教勢力の活躍を述べたもの) をマジュムダール氏が分擔し、その他は悉くダッタ氏の筆を執るところである。

第三部近代インド (pp. 631—1044) も、前後二篇に分かれ、第一篇はイギリス勢力の興隆と成長と題され、近世初頭にお

けるポルトガル人以下の西歐勢力の侵潤から、イギリス東インド會社の支配した十九世紀半ばまでの時期を十章に分けて取り扱つてゐる。この近世史の部分は、第二章 (イギリス勢力の興隆、一七四〇—一七六五年) を除く他の政治的經過に關する六章をダッタ氏が擔當し、第二章と末尾の社會經濟文化等の變遷に關する第八、九、十の三章はマジュムダール氏が分擔執筆してゐる。次の第二篇は現代インドと題し、イギリスのインド直接支配の始まつた一八五八年から、インド獨立の一九四七年八月十五日に至るまでのインド現代史を九章に分けて述べ、更に附篇二篇を追加して、以後に於ける狀態の變化を補足してゐる。この中で、一九〇五年までの政治經濟社會文化の諸發展を述べた前半四章と最近時の民族運動の進展を説いた最後の第九章とをマジュムダール氏が扱ひ、他はダッタ氏が論述してゐる。この兩篇の後に、第三部を通じての王家系譜と總督表 (十八世紀のベンガル總督時代から最近のインド聯邦・パキスタンの大統領や首相までを含む) 及び文獻目録がある。

以上の本文の次に、全體を通じての年表 (pp. 1045—1088) と索引 (pp. 1089—1122) とがあり、最後に色刷の地圖四葉が附録されてゐる。また篇中隨處に優秀な寫真版などが大量に挿入され、理解を助けてゐる。

### 三

インド史全體の概説書は、これまでかなり出てゐる。その中、一般に迎へられたものを挙げると、古典的となつたエルフィンストン、ホイラー等の著作<sup>(5)</sup>を挙げば、まづ最も早いものと<sup>(6)</sup> W. W. Hunter: A Brief History of the Indian Peoples. Oxford 1883. がある。頗る讀者を獲て一九〇四年までに二十數版を重ねたが、非常に簡單な内容であり、また現在となつてはもう古い。次には

The Imperial Gazetteer of India. Vol. II: Historical. Oxford 1909.

が挙げられる。Gazetteer 第三版の一冊として、多くの専門家により多方面のことが記されて重寶であるが、纏まつた

通史ではなく、またこれだけでは古くなつたところが多い。その次に有名な

V. A. Smith: The Oxford History of India. Oxford 1919.

が来る。インド史に關する數々の力作を著したスミス氏の名著で、後に S. M. Edwards 氏により一九二一年の事實まで増訂された第二版(一九二三年等)が出た。一世代を経た今日もやはり基礎的な書の一と認められ、特に文獻解説は獨特で有益である。次に出たのは The Cambridge History of India であるが、豫定された全六巻のうち第二巻が未刊で、その内譯は

I. Ancient India (E. J. Rapson, ed.). 1922.

III. Turks and Afghans (T. W. Haig, ed.). 1928.

IV. Mughul Period (R. Burn, ed.). 1937.

V. British India, 1477—1858 (H. H. Dodwell, ed.).

1929.

VI. The Indian Empire, 1658—1918 (H. H. Dodwell,

ed). 1932.

である。ケンブリッジの他の歴史叢書と同様な體裁で、多數權威者の共同執筆になり、今までに最も廣濶な且つすぐれた内容をもち、文獻目錄も出版時までに關してはイグゾースティヴなものである。たゞ長年月に亘つてなほ未完であり、その後の研究成果が盛られてゐない憾みがある。<sup>(4)</sup>なほ、

J. Allan, T. W. Haig and H. H. Dodwell: The Cambridge Shoter History of India. Cambridge 1934.

はこの間に出て、必ずしも前者の縮刷とは云へず、内容的にその缺を補ふところもあり、また大部な前書と異つて、容易に参照し得る長所があり、これまで手頃な概説書として信憑された。たゞその後十數年を経過して改訂がなく、また六冊本に完備する文獻目錄や年表・図版などを一切缺いている。また此等と略々同時に出たものに、故 Louis de La Vallée-Poussin 教授の三著

Indo-européen et Indo-iraniens. Paris 1924.

L'Inde au temps des Mauryas et des Barbares, Grecs,

Scythes, Parthes et Yue-Tchi. Paris 1930.

Dynasties et histoires de l'Inde depuis Kanishka jusqu' aux invasions musulmanes. Paris 1935.

がある。文獻を詳記した綿密なものであるが、インド學者の著作として古代史のみで、以後の時代はない。<sup>(5)</sup>次に挙げられるのは

W. H. Moreland and A. C. Chatterjee: A Short History of India. London 1936.

であらう。回教徒支配時代の社會經濟史に數々の業績を遺した故モアランド氏を主とするこの書は、現代的關心に立脚して、社會や經濟の變遷が一貫して明確に説かれた特色ある概説書で、アトラクティヴな内容を有ち、多くの關心を喚んだ。一九四四年に増訂第二版が出てゐるが、政治史の變遷などは簡單である。<sup>(6)</sup>その次には左の二著が挙げられる。

H. G. Lawrinson: India. A Short Cultural History.

London 1937.

do: A Concise History of the Indian People, Ox-

ford 1938.

前者は The Cresset Historical Series の一冊で、文化史に詳しく、一九四八年に改訂版が出て居る。後者はスミス氏の書をアブ・ツィ・デイトにまた平易にしたやうな教科書式の書で、一九四六年に改訂版が出、五年にその再版が出た。簡單であるが、一九四六年頃までに出て、何らかの意味で注目された概説書としては、大體以上のやうで、その數は多くない。此等は各々特色を有し、その限りでは大部分が現在ものほ參考さるべき價值があるわけであるが、非常に大部なものを除けば、簡單な入門書か、或は特殊な部分に詳細であるために、包括的な概説書と云へないものが多い。しかも殆ど全部が最近時の叙述を缺いてゐる。インド史にとつて最近二十年、二十年の歴史は最も變化に富み重要な部分であつて、この不備は早急に補はれなければならなかつた。

#### 四

インド史學は着實に進歩してゐるのであるから、新しい時

代の要求に應じ、最近の研究成果を採り入れ、一冊を以てあらゆる必要を略々充たすに足る有用な綜合的概説書が望まれたわけである。

紹介する書は、かうした事情の下に書かれ、インド史の簡單な知識を有つ者に利用さるべき高級な概説書を目指してゐる。八折本で一一三五頁に及ぶ大冊であるから、一冊に纏まつたインド史としては在來のどの書よりも分量が多く、従つて盛られた事實が豊富である。しかして量的に單に豊富なのではなく、質的に高級な内容が扱はれ、また概してインド史學界の最新最高の成果が採り入れられてゐると云へよう。

例へば古代史の部門は、最近に於て特に研究の進展の顯著なところであるが、根本史料に基く詳細な研究をすゝめて名著を出し更に改訂を續けてゐるライチョーダリー氏によつて明確な描寫を與へられてゐる（未解決の問題の依然として多い事は勿論であるが）。また先史時代ではあるが、インダス文明に對する記述を例にとれば、スミス氏の「オクスフォード・インド史」には全くなく、「ケンブリッジ・インド小

史」に辛うじてその記載を見たのであつて、この概説の發見遺物の説明、その解釋の部分を読めば、この間の進歩に如實に氣づくであらう。

また社會や經濟の發達に重點が置かれてゐるのも、この書の長所である。古代史に於ては、これまでも文化史的研究が大に進み、社會史經濟史的研究も或る程度はあつた。これは主として史料の關係とインド學の進展に伴ふものであつたらう。この書では古代は勿論、更に中世の回教徒支配の時代に於ても、第一篇第六章と第二篇第六・七・八章の四章計八〇頁に互つて、社會制度、經濟生活、思想學術、文學藝術などの方面を取り扱つてゐる。これは從來の類書に見られなかつたところで、かうした方面の重視は近代史の隨處にも見られるのである。

更にこの書の特色の一として著者三氏がいづれもインド人のインド史家であることが考へられる。インド獨立の前後にその民族意識が特に興揚したのは當然であつて、この傾向はインド史學界にも看取される。獨立直後に史學研究の雜誌が

相次いで出刊されたことや、「ケンブリッジ・インド史」に比較さるべきインドの史學者達による甚大なインド史の計畫や出版など、その好例と思はれる。<sup>(9)</sup>

この書も、三人のイギリス人のインド史家による「ケンブリッジ・インド小史」に對比さるべきところが多く、その構成や内容の敘述に於てこれを利用してゐる部分が少なくないのであつて、恐らく、少くとも暗々裡には、この書以前の標準的概説書としての「小史」を凌駕する意氣込みがあつたのであらう。

かうした事情を反映して、書中の諸處に特色ある扱ひが見られる。冒頭にインドの統一性を詳論したことや、インド文化の海外發展を説いても「インドの偉大」が含蓄されてゐること（第一部第十五章）などもその例である。またアレクサンダーのインド遠征について、從來西洋人の手になる歴史書には、何れもかなり詳述してあるが、この書では、「ペルシャ及びマケドニアの侵入」の項下に數頁を費すのみで、特に一章をさくをせず、その次にマウルヤ帝國の章を置くといふ叙

述法であることが注意される。

かゝるインド人としての自國の歴史の再評價が、特に近世史の部分に著しいのは當然である。インド國民會議の發展に關する記述の分量が比較的多く、また云はゆるセポイの叛亂については、これを近世史前期の終り（第一篇第七章）に扱ひ、その性質や結果などを主として述べてゐる。

このやうな新しいやり方は、必ずしも偏狹な民族意識の結果ではなく、インド人として自國の歴史に對する正當な見方や立場を示さうとしたものと思はれる。重點の置き所が異なるために、時に誤解を招く恐れがあるかと思はれるところもあつて、特に近世史の部分は「ケンブリッジ・インド小史」と併讀が望ましい箇所があるが、その叙述は概して公正で納得されるのである。

## 五

大部な書であるから、讀過に際して、異見の生じ得る個所や、二三の希望が附される點もないわけではない。

例へば、カニシュカ王の即位年代については、諸説が提出されて難しいところであるが、これが明確でない（一二〇—一二二頁）。高級な讀者を對象とする概説書では、種々の見解の存する場合には、一應の説明があるべきであらう。

第一部第十五章（植民的及び文化的發展）はマジウムダール氏の得意の問題で、數多く出た最近の諸論考に基いてよくまとめられてゐるが、同様な主題の經濟的な面が疎略であるかと思はれる。中世の南洋におけるインド産綿布の流通は、インド教佛敎の傳播と同様に、インドの東南アジアに對する關係の重要性を示す事實であり、また、此の方面に對するヨーロッパ勢力の優位が近世初頭において確立するに至るまでの、最も注目すべき經濟史的現象であるが、このことについて殆ど問題とされてゐない。

トゥグルク朝、殊にムハンマド・トゥグルク時代（三一七—三二六頁）の完備した驛遞制度については、當時滯印のイブン・バトゥータの旅行記に詳細に見えて、有名な事實であり、この時代の政治や社會の説明に當つて逸すべからざるも

のであると思はれるのに、このことについて觸れてゐない。

バーブルがムガル朝の基礎を築いたバーニーパットの戦（四二七頁）について、數倍の大敵に對するバーブルの勝利を砲兵の存在に歸する俗説をそのまゝに記してゐる。<sup>(12)</sup>

圖版は頗る多數挿入されてゐて有益であるが、頁數の割に地圖が少い。卷末の四葉は、英領最終時（一九四七年）のもの、インド聯邦・パキスタン成立後の新政治地圖、インド地勢圖、主要言語分布圖で、その他に本文中の挿入圖としては、

古代インド、中世初期インド、古代アジヤ、デリー諸王朝時代、ムガル時代、ムガル末期、中世のインドと西洋の七圖があるだけで、「テンブリッヂ・インド小史」の二十一圖に比しても遙かに不足の感がある。例へば英領インドの成立過程を示す地圖など不可缺であらう。<sup>(13)</sup>

文獻目錄はセレクトド・ビブリオグラフィであるが、「テンブリッヂ・インド史」刊行以後の新しい文獻、特にインドで出たものを足してゐて便利である。しかし概説書の参考書目としては、單に書名を列記するだけでなく、同時に簡單な

文獻解説を含むことが是非とも望ましい。解説を簡單に誤解の惧れなく記すことは容易な仕事ではないが、初學者や専門外の利用のためには最も必要なことである。なほ書名・著者名に綴字の誤があつたり、刊行地、出版年が殆ど記されてゐないなどの嚴密さに缺ける點がある。また年表はやゝ簡單なものであるが、誤脱と思はれるものがないわけではない。例へば、一六三七年と云ふ年數が脱落してゐるやうである。

## 六

以上、思ひつくまゝ二三の不備の例を舉げて見たが、利用者の立場により概説書に對して色々な注文がつけられるのは當然とも云へる。誤は逐次改訂されて行けばいいことであつて、かうしたことにもかゝはらず此の書の價值は依然として大きいのである。

すぐれた概説書とは、史學を志す者にとつて、語學者における辭書に似た意味を持ち、たえず座右に置いて使つて見て間に合ふものがいゝのであらう。その意味では、一冊の書で



豊富な内容を盛り、年表・系譜・地圖・圖版・文獻目錄・索引の類が一應備はり、最近の事實まで含んでゐる新しい概説書は、今までのないものとして最も役に立つてゐる。

## 補注

(1) 參考せしむべき氏の主要業績を挙げる。

Ramesh Chandra Majumdar: *Outline of Ancient India, History and Civilization.*

—: *Corporate Life in Ancient India. Calcutta 1918; 1922 (2).*

—: *Ancient Indian Colonies in the Far East, I. Champā.*

Dacca 1927.

—: *Ancient Indian Colonies in the Far East, II. Suvarna-*

*dvipa. 2 vols. Dacca 1937—1938.*

—: *Kambuja-Desa, or an Ancient Hindu Colony in Cambodia. Madras 1944.*

—: *Hindu Colonies in the Far East. Calcutta 1944.*

—(ed.): *The History of Bengal. Vol. I: Hindu Period. Dacca*

1943.

—, and A. S. Altekar (ed.): *A New History of the Indian*

マシユムダール、ライチョーダリー、ダッタ三氏共著「高等インド史概説」

和田

People. Vol. VI: *The Gupta-Vakataka Age. Lahore 1946.*

—(General editor): *The History and Culture of the Indian*

People. Vol. I: *The Vedic Age. London 1951; Vol. II: The*

*Age of Imperial Unity. 1952.*

Hemchandra Raychaudhuri: *Political History of Ancient India.*

Calcutta 1923; 1950 (5th ed., rev. & enl.).

—: *Studies in Indian Antiquities.*

Kalikinkar Datta: *Alivardi and his Times. Calcutta.*

—: *Santal Insurrections of 1855—57. Calcutta.*

—: *Studies in the History of the Bengal Subah 1740—70.*

Vol. I: *Social and economic. Calcutta.*

—: *The Dutch in Bengal and Bihar, 1740—1825 A. D. Patna*

1948.

なお前兩氏の業績の詳細については ABIA の各巻を参照。

(2) インド史に關する著書は、初期にはイギリスのインド文官の手になるものが多かった。概説書の代表的な物として次の兩書を挙げる。

M. Elphinstone: *The History of India. The Hindu and Maho-*

*metan Periods. 2 vols. London 1841.*

J. T. Wheeler: *The History of India. From the earliest ages.*

5 vols. London 1867—1881.

前者は度々版を重ねて一八七四年に六版となり、八六年に E. B. Cowell の増訂を経て一九一六年に第九版を出してゐる。此の好評のために彼はインド史のタキトウスと呼ばれ、この書の史料的價值はなほ存する。

(3) インド史概説として最も重要なべき最近三十年が缺けてゐるのは、此の史書の第一の弱點である。なほ同氏にはより簡約な學生版 (The Oxford Student's History of India. Oxford 1908.) があり、H. G. Rawlinson の改訂の下に引きつゞき版を重ね、一九五一年に第十五版が出ている。

(4) 第二卷 (Medieval India) は近刊の噂を聞いて久しいが未刊のやうである。全體に増訂の必要があるわけであるが、最近一部の補卷が出る由である (Supplementary Volume The Indus Civilization by Sir M. Wheeler)。これも最近三十年餘の歴史を缺く。

(5) 此等三書は Histoire du monde 叢書に含まれる。同叢書には、これを次ぐ回教インディヤ時代史として Ishwari Prasad: L'Inde du VII<sup>e</sup> au XVI<sup>e</sup> siècle, Paris 1930. があるが、近世史は無く、なほこの書は良書とされる Ishwari Prasad: History of Mediaeval India. Allahabad 1925; 1940 (2). の佛譯であるが良譯となく由。

(6) その後一九五二年の再増訂版が出たやうであるが未見。簡單な内容の中に社會や經濟の變遷を中心に説かうとした興味多い良書であるが、従つて何でも書いてあると云ふ概説書ではない。また多少の無理も感ぜられ、現代史の部分が弱いやうである。此の書に對する紹介批評は数多いが (ABIA, 1937 参照) わが國では岩永博氏のもの (回教圈 (二の六) がある。

(7) 此等の他にも概説書は多數あるが、多くは教科書式のものか、現在必ずしも讀むに當らないものと思はれる。たゞ次の書は舉げるべきかも知れないが未見のため省いた。なほ注(10)参照。

Ishwari Prasad: A New History of India. Allahabad 1936.  
なほ最近の書として P. Meil: Histoire de l'Inde. Paris 1951.  
は《Que Sais-Je?》文庫の一冊で小冊であるが、要領がよい。

(8) L. Renou: JA, 1951, pp. 85—86. 参照。

(9) 従来からあつた Indian Historical Quarterly; Journal of Indian History; Journal of the Uttar Pradesh (previously called United Provinces) Historical Society; Journal of the Andhra Historical Research Society; Journal of the Bombay Historical Society 等の續刊、再出發のほか、純史學雜誌として一九四六年創刊のもの Annual Bulletin of the Nagpur University Historical So-

ciety: Ancient India 兩誌があり、一九五〇年創刊の Journal of Dakkan History and Culture がある。この他に大學や研究所の史學關係の紀要年報の類も此の間に多數創刊されてゐる。

(9) 併記した The History and Culture of the Indian People で、既出二卷であるが、全十卷の豫定で、此の叢書出版のためにインド人有力者の間にインド史學會 (The Academy of Indian History) が創設され、全篇インド史學者の執筆である。また、A New History of the Indian People (注①参照) も類似の計畫であらう。

なほ、最近には左記のやうなインド人による概説が出てゐる。

K. M. Panikkar: A Survey of Indian History. Bombay 1947.

Nlakanta Sastri: History of India. Vol. I: Ancient India. Madras 1950; Vol. II: Mediaeval India. Madras 1951.

N. K. Sinha and A. C. Banerjee: History of India. Calcutta 1950.

(10) ドウグル朝の驛遞制度については、Turks and Afghans (The Cambridge History of India, III), pp. 129-130. を参照。

(12) このことについては、Encyclopaedia of Islam, s. v. 'Paipat'.

(13) インド史の理解上における地圖の重要なことについては、C. C.

マジュムダール、ライチョーダリー、ダッタ三氏共著「高等インド史概説」

和田

Davies: An Historial Atlas of the Indian Peninsula. Oxford 1949. の序など参照。

(お茶の水大學講師)

文學博士 加藤 繁著

支那經濟史考證

卷下 (東洋文庫論叢三四ノ下)

A5版、九六〇頁、圖版一一頁。

定價千二百圓。

本卷には宋代より清代まで及び金時代に亘る論文三十七篇・附錄五篇を收め、他に英文要約・全卷索引・著作者小傳・年譜・著作年表を附す。

(上巻は古代より唐宋までの論文二十一篇及び「支那古田制の研究」を收む。定價八百圓。)

東京都文京區上富士前町一四七

發行所 財團 東洋文庫  
法人

振替東京六七〇二二

東京都文京區大塚仲町二

發賣元 株式會社 不味堂書店

振替東京六八七三九

第參拾六卷 一二五